

古川 知 明

(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

石工佐伯伝右衛門について、筆者は旧稿において、富崎村（現富山市婦中町富崎）出身の神通川石工の一人として紹介した〔古川 2011〕。しかしその後、伝右衛門の在銘石造物の調査が進展し、伝右衛門が富山町石工であることが判明したため、本稿において訂正するとともに、伝右衛門における石造物製作の具体像を把握するものである。

1 研究史

佐伯伝右衛門作石造物を最初に紹介したのは、尾田武雄氏による砺波市芹谷山千光寺の宝篋印塔報告である〔尾田 1995〕。天明 6（1786）年造立宝篋印塔の銘文を紹介し、台座東面に「越中富山住人 大石工 佐伯伝右衛門」とあることを報告した。

筆者は、法界山常楽寺宝篋印塔が佐伯伝右衛門作であることを確認し、千光寺宝篋印塔と合わせ、製作の特徴を紹介した〔古川 2011〕。この中で銘文をもとに本寺の所在する富崎村出身の石工とした。しかしその後銘文の詳細調査を行ったところ、「富崎」でなく、後述のように「富城」、すなわち富山城下町に工房を持つ富山町石工であることが判明した。ここで訂正しておきたい。

また筆者は、千光寺宝篋印塔における浮彫文様が吉祥文を採用した最古の事例であり、その後吉祥文の付けられる位置が変化したことを示した〔古川 2012〕。

2 伝右衛門製作石造物の概要

伝右衛門が製作した石造物は 4 基があり、すべて寺院に置かれた宝篋印塔である（表 1）。

(1) 千光寺宝篋印塔

砺波市芹谷の真言宗芹谷山千光寺境内に所在する。石塔は 63 世順遍代の天明 6（1786）年に造立された。相輪・笠・塔身 4 段・基礎 2 段の 8 段構成である。本体下には凝灰岩の板石組基壇がある。本体は立山天狗山石製で、基礎に祥雲文・波涛文を用いるほか、中央に牡丹、その左右に獅子・狛犬を置く構図の浮彫文様がある。

特徴的な造形として、基礎を四脚にし、中央に饅頭形の支え石を置く。支え石側面には龍文と波涛文が浮彫される。造形はかなり細部まで細かく彫出した精巧な作品である。

基壇は笏谷石切石積で、箱形である。基壇基礎は軟質の凝灰岩である。基壇以下は当初からのものか不明である。台座東面には「越中富山住人／大石工／佐伯伝右衛門勝行」と刻銘がある。

(2) 常楽寺宝篋印塔

富山市婦中町千里の真言宗法界山常楽寺境内に所在する。石塔は、寛政 3（1791）年造立で、相輪・笠・塔身 4 段・基礎 2 段・基壇 4 段の 12 段構成である。石材・形態ともに千光寺と近似し、基礎下部の牡丹・

表 1 佐伯伝右衛門作石造物一覧

番号	在銘年号		所在地	寺院情報	石工名表記	石材	意匠
	和暦	西暦					
1	天明6	1786	砺波市芹谷	真言宗芹谷山千光寺	越中富山住人 大石工 佐伯伝右衛門勝行	安山岩・凝灰岩	祥雲文・波涛文・牡丹文・獅子狛犬文(基礎)/龍文・波涛文(支え石)
2	寛政3	1791	富山市婦中町千里	真言宗法界山常楽寺	富城住人／石工／佐伯伝右衛門／吉忠	安山岩	祥雲文・波涛文(基礎)/龍文・祥雲文・波涛文(支え石)
3	寛政7	1795	富山市太田南町	真言宗立本山刀尾寺	富山／伯佐／石工／伝右衛門	安山岩	なし
4	文化2	1805	富山市八尾町深谷	真言宗深谷山祇樹寺	—	安山岩	龍文・祥雲文・波兔文(饅頭形)

獅子・狛犬の浮彫りの欠落、基壇が6段の階段状である等相違がある。

基礎2段目の切石に「富崎住人／石工／佐伯傳右エ門」と刻銘がある。基礎1段目側面の格狭間内には、祥雲文・波涛文を浮彫りする。本塔での大きな特徴は、基礎1段目の下半を四脚として立体化し、中空となった中央に饅頭形の支え石を入れている。その支え石の側面には龍文・祥雲文・波涛文が浮彫りされている。

(3) 刀尾寺宝篋印塔

富山市太田南町の真言宗立本山刀尾寺境内に所在する。石塔は、寛政7年造立で、相輪・笠・塔身4段・基礎・基壇4段の11段構成である。形態は、これまで見られた基礎の四脚+支え石は無くなり、常願寺川石工製作宝篋印塔と基本構造が共通した形態に変化する。また基礎・基壇側面に見られた浮彫文様は消滅し、簡素化する。

石工名は、基壇1段目東面に「富山／伯佐／石工／傳右エ門」と刻銘がある。「佐伯」を入れ替え「伯佐」としている。

(4) 祇樹寺宝篋印塔

2012年に実測調査を行い報告した宝篋印塔である(図1)〔富山市教委埋文センター編2012〕。

富山市八尾町深谷の曹洞宗深谷山祇樹寺境内に存在する。文化2(1805)年25世住職俊英和尚により造立された。相輪・笠・塔身4段・基礎・基壇5段の12段構成である。相輪上部が欠損する。

饅頭形(敷茄子)3面に浮彫文様があり、正面に龍と祥雲文(図2)、その他の面には四足動物(兎)+波涛文すなわち波兔を表現する。

基壇板石には4面に計166名の僧籍者位号・信徒戒名の刻銘と、4段目最末尾に「三界万霊」の刻銘がある。これらの人々は願主か供養者か不明であり、過去帳の分析を待たねばならない。本塔には石工銘は存在しない。

3 伝右衛門作例についての分析

(1) 伝右衛門の刻銘

3基の宝篋印塔には、伝右衛門が石工名を刻銘している(図3)。

千光寺では伝右衛門勝行、常楽寺では伝右衛門吉忠となっており、別人であることがわかる。字体も「石」に点の有無、「工」に通常形とコ形等の相違が認められる。ここでは勝行を初代伝右衛門、吉忠を2代伝右衛門とする。刀尾寺では、「石」に点があり、「工」が通常形であることから初代勝行と考えられる。刀尾寺ではまた、「佐伯」が「伯佐」と反転しており、2代吉忠との差別化を表現したものとも考えられる。

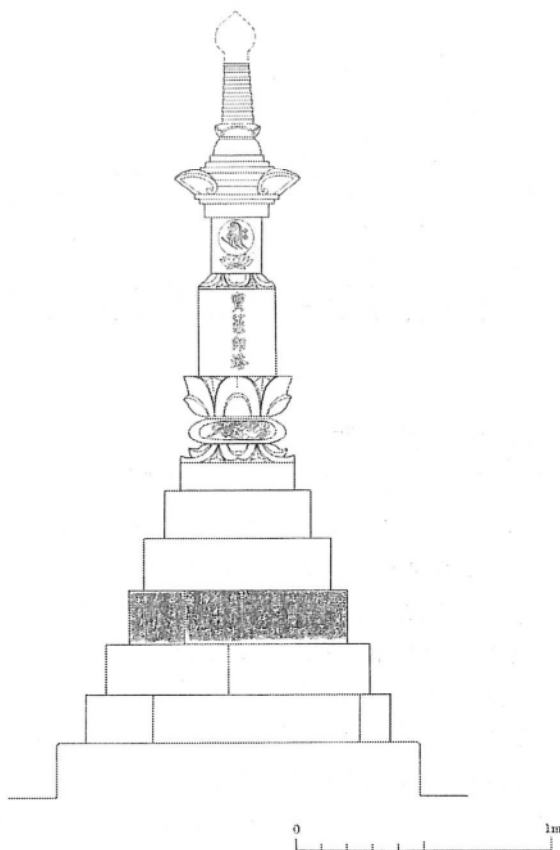


図1 祇樹寺宝篋印塔

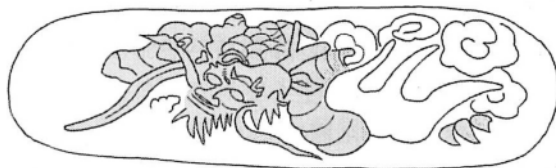


図2 饅頭形の龍文

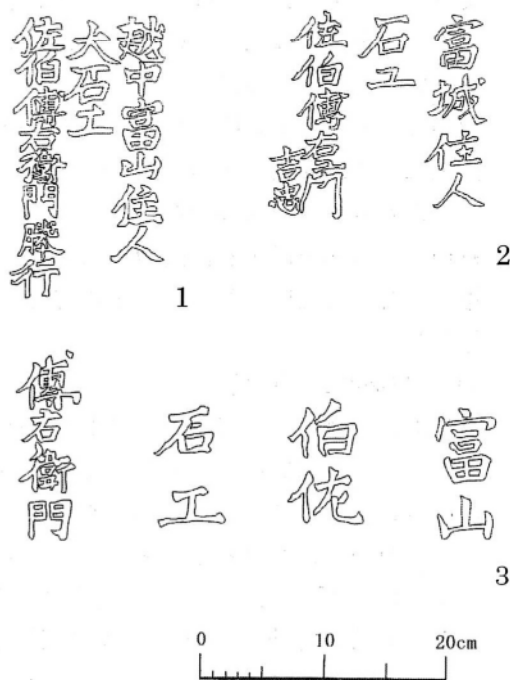


図3 伝右衛門の刻銘

1:千光寺、2:常楽寺、3:刀尾寺

表2 宝篋印塔の属性

番号	在銘年号		寺院	塔高		隅飾突起外傾角度	軸2銘文			基礎銘文
	和暦	西暦		寸	cm		正面	背面	その他面	
1	天明6	1786	千光寺	94	284.8	74	経文	造立経緯・願主	造立経緯・経文	願文・供養者・石工名
2	寛政3	1791	常楽寺	(88.6)	(268.5)	65	経文	造立経緯・願主	元明真言梵字・経文	石工名
3	寛政7	1795	刀尾寺	91.7	277.85	60	「宝篋印塔」	光明真言梵字	経文・供養者・願主・造立経緯	願文・石工名
4	文化2	1805	祇樹寺	86.75	263.5	49	「宝篋印塔」	造立経緯	経緯・経文?	位号戒名166人

「経文」は、宝篋印陀羅尼經

(2) 伝右衛門の特徴と推移

伝右衛門は2代にわたることが判明した。また、石工銘の検討から、ある時点をもって代替りしたのではなく、2人の伝右衛門がそれぞれ伝右衛門を名乗る重複期間があったとみられる。よって、それぞれにおいて特徴等の変化を見る必要がある。

初代伝右衛門勝行は、天明6年千光寺宝篋印塔、寛政7年刀尾寺宝篋印塔を製作した。この間10年間である。千光寺において宝篋印塔で初めて基礎四脚化+支え石という立体化を行い、また基礎文様に初めて浮彫文様を採用した。刀尾寺では立体化・浮彫文様が消え、様相を異にする。この様相は常願寺川石工が製作する宝篋印塔に近似しており、発注者における意図が反映している可能性がある。

2代伝右衛門吉忠は、寛政3年常楽寺宝篋印塔を製作した。立体化・浮彫文様は初代を踏襲しており、初代との変化は、基礎側面・支え石における文様構成であり、基礎側面における牡丹+獅子狛犬の消滅と支え石における祥雲文の加飾である。

2人の伝右衛門に共通した特徴は、笠の隅飾突起が大きく外傾することである。この外傾度の変化をみたものがグラフ1である。年代の経過とともに、次第に起きあがって行くことがわかる。常願寺川石工においては、寛政後期以降製品が増加してくる。その変化をみると、年代の経過とともに次第に外向きに広がって行くという、全く反対の傾向を示している〔富山市教委埋文センター編2012〕。

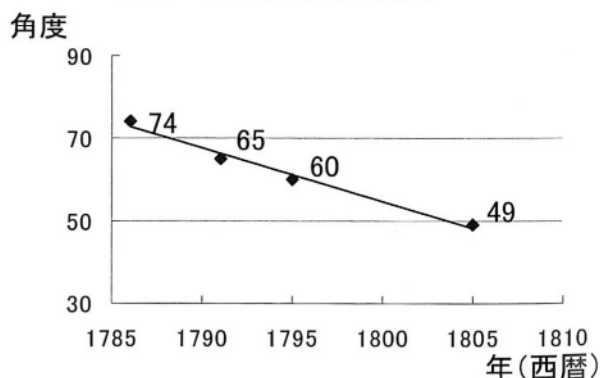
一方、銘のない祇樹寺では、常願寺川石工製作宝篋印塔群における隅飾突起外傾角度の傾向に含まれず、部分改修もしくは常願寺川石工以外の石工による製作の可能性を想定した〔富山市教委埋文センター編2012〕。同塔ではまた常願寺川石工が幕末まで採用していない龍文が採用されている。この2点についてみると、隅飾突起外傾角度は伝右衛門の3基の近似曲線の延長上にあり、龍文は伝右衛門が初期塔に採用しておりメインの文様である。以上により、祇樹寺宝篋印塔は伝右衛門製作によるものと推定しておきたい。おそらく2代吉忠の作と思われる。

(3) 伝右衛門の工房地

伝右衛門は、千光寺では「越中富山住人」、常楽寺では「富城住人」となっている。富山城下町内に工房を置いたことがわかる。ただし、城下町内のどこに工房を置いたかは情報がなく不明である。

富山町石工における工房所在地の表記についてみると、「富山」の表記は、伝右衛門の天明6年が最も古く、別の石工では、天保3(1832)年見上兵右衛門が本誓寺境内自然石碑に刻銘するまで、46年も経過している。「富城」の表記は江戸期には他に例がない。城下町内の町名表記は、天保10年利波の自然石形石仏(道標)に林田喜助が「太田口」と刻銘するものが最初である〔古川2012a〕。

グラフ1 伝右衛門作宝篋印塔隅飾突起における外傾角度の変遷



(4) 伝右衛門の分布 (図4)

伝右衛門作例は、工房のある富山町内ではなく、最も近いのが刀尾寺例であり、1里弱(3.5km)である。その他の3例は3~4里以上の遠距離にある。常願寺川石工や富山町石工のうち複数の石造物を製作している石工らは、1里以内の近在地に集中する一方で、3~4里以上の遠距離に分布するものも認められている。このような状況が一般的であったとすれば、伝右衛門の分布状況は、近在地が少ない点で特殊なあり方といえる。

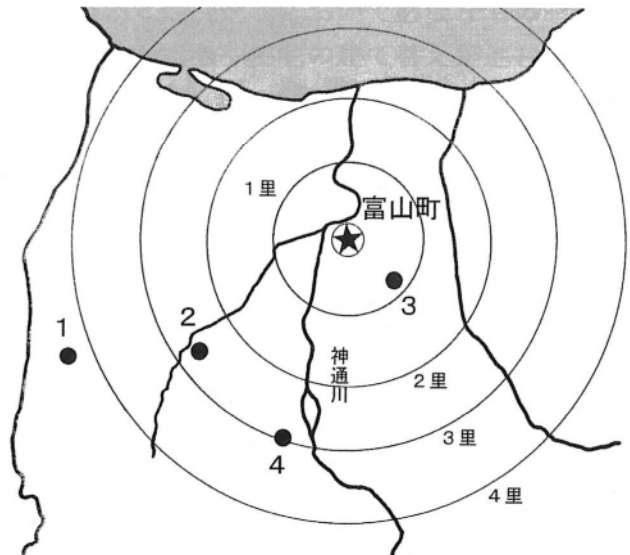


図4 佐伯伝右衛門作石塔の分布

1:千光寺、2:常楽寺、3:刀尾寺、4:祇樹寺

4 宝篋印塔製作における伝右衛門の位置づけ

富山町周囲における宝篋印塔製作は、主として神通川石工・常願寺川石工・富山町石工が担っていた。佐伯伝右衛門はそれらのうち、最古の石工名として位置づけられる。宝篋印塔における石工名刻銘の開始年代は、富山町石工では1786年から、常願寺川石工では1797年から〔富山市教委埋文センター編 2012〕、神通川石工では1858年から〔古川 2011〕であり、富山町石工が最も古いといえる。

このことから、伝右衛門は、常願寺川石工中川甚右衛門と同様、富山町石工において初めて石造物に石工名を刻銘するとともに、基礎に四脚+支え石という立体化、及び龍文・波涛文・祥雲文等浮彫文様を取り入れることで、富山町石工の伝統基盤を作る契機となった人物であると評価できる。

浮彫文様には、龍文・祥雲文・波涛文をメインとし、牡丹+獅子狛犬や四足動物の兎を配置する。龍や獅子狛犬の神獣は吉獣でもあり、波間の兎はいわゆる波兎と呼ばれ、月の精としての兎に子孫繁栄・豊穰等を与える瑞獣として扱われ、また火防・火除けの守りともされている。これらは総じて吉祥をあらわす吉祥文と理解される。吉祥文は、以後常願寺川石工が積極的に採用し、波涛文・祥雲文は常願寺川石工中川甚右衛門が文化6(1809)年頃から取り入れ〔古川 2011〕、龍文は唯一北野甚蔵〔古川 2013〕が弘化2(1845)年以降取り入れた。以上により、伝右衛門が採用を開始した吉祥文は、神通川石工から常願寺川石工への継承がなされ、常願寺川石工における個々の石工において選択・変容が行われたものと理解される。

おわりに

本稿では富山町石工佐伯伝右衛門の製作石造物について見通しを示したものである。個々の石造物についての詳細な記録化はこれからであり、調査の結果見直す必要が生じる可能性があることを付記しておく。

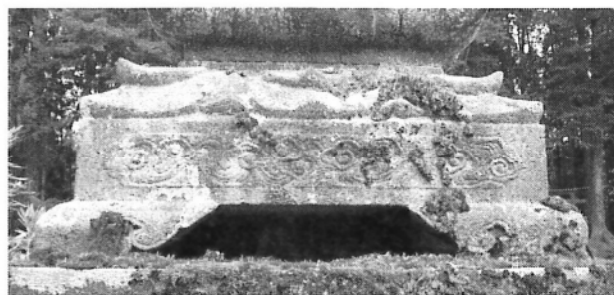
本稿の作成にあたり、尾田武雄氏、西井龍儀氏、千光寺・常楽寺・刀尾寺・祇樹寺各寺ご住職の協力を得た。記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 尾田武雄 1995 「芹谷山千光寺周辺の石造物中間調査報告」『土蔵』第8号 砺波郷土資料館土蔵友の会
富山市教育委員会埋蔵文化財センター編 2013 『富山市内石造物等調査報告書』
古川知明 2011 「神通川石工とその周辺—近世石工と在地石材—」『大境』第30号 富山考古学会
古川知明 2012a 「近世富山町石工について」『富山市の遺跡物語』第13号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
古川知明 2012b 「富山県東部における近世石造物研究—主に石工研究から—」『北陸の石造物—研究の現状と課題』石造物研究会
古川知明 2013 「常願寺川石工北野甚蔵について」『大境』第32号 富山考古学会



千光寺宝篋印塔(南正面)



千光寺宝篋印塔 基礎 祥雲文



千光寺宝篋印塔 基礎支脚



千光寺宝篋印塔 基礎2段目 石工銘



千光寺宝篋印塔 基礎2段目 菊花文・動物文(獅子狛犬)



常楽寺宝篋印塔 隅飾突起



常楽寺宝篋印塔(西右側面)



常楽寺宝篋印塔 基礎支脚



常楽寺宝篋印塔 基礎祥雲文



常楽寺宝篋印塔 基壇 石工銘



刀尾寺宝篋印塔 笠・軸1



刀尾寺宝篋印塔 (北正面)



刀尾寺宝篋印塔
基壇 石工銘



祇樹寺宝篋印塔（北正面）



笠 隅飾突起



請花・饅頭形・反花・基礎（西面）



饅頭形（敷茄子）波濤文・動物文浮彫（南面）



饅頭形（敷茄子）龍文浮彫（西面）



饅頭形（敷茄子）龍文浮彫（龍頭部分）

富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報

富山市の遺跡物語 第14号

平成25（2013）年3月29日発行

編集・発行：富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町1-2-24

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

E-mail: maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷：スカラ・ファクトリー